

海外スタディツアーの類型化と参加学生の自主的な学び

石川敬之
(地域共生教育センター)

キーワード

海外スタディツアー、フィールドワーク、主体性、反省、学び

要旨

本稿では、フィールドワークを取り入れた海外スタディツアーのプログラムが参加学生の学びに影響を与えていることを明らかにする。主体性を必要とするフィールドワークは学生に知的負荷をかけ、また海外での実践はより多くの苦難と失敗をもたらすが、逆にそのことが強いインパクトになって学生に反省をもたらし、学びへの気持ちを新たにさせると考えられる。ただ、このような成果はツアー参加学生の意欲や能力、また教員による適切な指導体制があってこそ可能になる。様々な状況を考慮したうえでのツアープログラムの設計が必須となる。

1. はじめに

1.1. 問題意識

近年、多くの大学で「海外スタディツアー」が実施されるようになってきている。訪問先やツアー内容は様々であるが、そこに共通するのは一定期間現地に滞在し、そこでの体験を通じて参加学生たちに学びを得てもらうというものである。またツアーの参加者たちが、その限られた日程のなかで事前に決められたプログラムを体験していくことも特徴のひとつである。

では、このような海外スタディツアーの参加者たちは、そのツアーから一体どのような学びを得るのだろうか。おそらく現地を訪れた参加者たちは「よい体験」をすることになるだろう。初めて目にする光景や興味深い話、また現地の人々との交流などはかけがえのないものになるはずである。実際、ツアー参加者による事後アンケートの分析などをみても、その多くが現地での体験を有意義なものとして評価している（岩下、2017；人見、2015；三宅、2015）。しかし、

「プログラム体験型」とも言えるこうしたスタディツアーでは、その参加者の行動は事前に組まれたスケジュールに沿った受動的なものになる。プログラム設計者が見てほしいものや体験してほしいことをツアー参加者はそのまま受け入れて行動することになる。もちろん、こうしたことに問題があるわけではない。限られた予算や時間の中で効果的な体験学習を行うためにツアーのプログラム化は必要である。また、まずは体験するということが自体に価値があるとも言える。しかしながら、海外スタディツアーのあり方として、ツアー参加者の主体性が発揮されるようなものがあってもよいと考えられる。現地での経験を通じて生まれた関心や疑問を自らの力で解決していくことができれば、そのスタディツアーはより多くの学びにつながっていくと考えられる。

こうした問題意識のもと、本稿では大学が行う海外スタディツアーを二つのタイプに分け、それぞれの特徴を整理したうえで、それらが参加学生に対してどのような影響を与えるのかを検討する。実際に二つのスタディツアーに参加した学生がどのような経験をし、またそこからどのような気づきや学びを得たのかを示していくことにする。

1.2. 本稿における二つの海外スタディツアーについて

本稿において海外スタディツアーの特徴を区分する視点は、そこに学生の主体的な行動を伴う調査活動があったかどうか、またその調査結果を現地で発表する機会があったかどうかというものとする。ここでの主体的な調査活動とは、学生自身が現地で行うフィールドワークとする。自らの関心に基づいた調査テーマを掲げ、現地での観察やインタビューなどを行ってデータを収集し、分析するものである。もちろん限られた時間の中で行われるために簡易的なものとなる。本稿では、このようなフィールドワークが海外スタディツアーに含まれる場合、そのスタディツアーを「主体性重視型海外スタディツアー」とし、逆にそうした学生による調査活動や発表会が含まれず、大学側が用意したプログラム、たとえば主要な施設や史跡を見学したり、現地の人々との意見交換や交流会などを体験してまわるツアーを「プログラム体験型スタディツアー」とする。当然、この二つのツアーは明確に区分されるわけではなく、前者に現地を見学するプログラムが含まれるであろうし、後者にも現地で感じたことを議論し合うような機会が設けられていることもある。ただ、そうしたなかであっても、ツアー参加者が自ら調査テーマを定め、それに基づいたフィールドワークを行い、その調査結果を現地で発表するプログラムがあるかどうかという点は両者を区別する大きな違いになると考えられる。したがって本稿では、この基準を持って「主体性重視型スタディツアー」と「プログラム体験型スタディツアー」を分けることにする。そして、この二つのスタディツアープログラムが参加学生に対してどのような影響を与え、かつ学生たちの学びにどうつながっていくのかを検討していく。

以下、本稿の構成は次のとおりである。まずは二つの海外スタディツアーの特徴を整理する。続いて、それぞれの海外スタディツアーに参加した学生からのアンケートデータを用い、各ツアーから得られた経験と学びの関係性を分析する。最後に分析結果からの議論と今後に向けた海外スタディツアーのあり方を示す。

2. 海外スタディツアーとは何か

2.1. 大学と海外スタディツアー

現在、多くの大学が海外スタディツアーを実施しているが、これはグローバル人材の必要性が問われるなかで学生に海外での学びの機会を提供し、グローバルに活躍できる人材を育成しようとする大学の取り組みのひとつである（池内・齊藤・簗本・吉田、2014）。もちろん、海外での学びの機会は、これまでも留学などがあった。近年では海外の大学との連携も進み、学生は休学することなく、また別途学費を払うことなく海外で学ぶことができるようになっている。また長期休暇を利用した語学留学なども一層の広がりや充実を見せている。しかしながら、こうした留学にはやはり語学力と中長期に渡る海外での生活が必要となり、相応の金銭的な負担も生じる。そのため海外で学ぶ学生には強い意志が求められることになる。

一方で、海外スタディツアーは海外留学ほどの負担を強いられるものではない。一週間程度の日程で海外を訪れ、現地の雰囲気を知ったり、様々な体験をしたりすることができる。また大学教員などが同行するケースがほとんどなので、海外に興味を持ちつつも不安であったり、語学力が乏しい学生も参加しやすくなっている。大学側も海外スタディツアーをきっかけとして、より多くの学生に海外に興味を持ってもらうことを期待している。では、この海外スタディツアーについて、さらに詳しくその特徴を整理していく。

2.2. 海外スタディツアーとは何か

そもそも大学が行う海外スタディツアーについて統一的な見解があるわけではない。子島・藤原(2017)は「(海外スタディツアーには:筆者注) 大学によって「フィールドスタディ」や「海外フィールドワーク」などといった異なる名称が与えられている」とする。確かにそのような現状はあるかもしれない。ただ、ここで記されている「フィールドワーク」と「スタディツアー」は混同されるべきものではないだろう。その違いを意識したうえで本稿では「海外スタディツアー」を次のようにとらえる。まずは、やはりそれは「ツアー」だということである。「ツアー」=観光であるため、現地での活動は見学や体験などが中心となる。つまり事前に設定されたプログラムがあり、参加者はそれらを順にまわっていく。これが海外スタディツアーの第一の特

徴となる。また、そのように参加者が順次見て回るプログラムは主催者側が用意するものであり、ツアー参加者自らが設定するわけではない。これも海外スタディツアーの特徴となる。つまり海外スタディツアーでは主催者によって設定されたプログラムがあり、参加者はそれらを体験しながら学びを得ていくことになるのである。

それでは、逆に「フィールドワーク」とはどのようなものか。厳密に言えば、フィールドワークのとらえ方も学問分野や識者によってさまざまであるが、スタディツアーとの比較にもとづくと、少なくともフィールドワークというのは調査研究であり、そのために見たり聞いたりするのは調査者自らが決定することになる。スタディツアーが他者によって設定されたプログラムを見てまわるものだとすると、両者の違いは明確になるだろう。

一方で、海外スタディツアーと海外フィールドワークにも共通点はある。それは、参加者の学びを志向していることである。フィールドワークについては言うまでもなく、スタディツアーにおいても、その見学や体験は参加者の学びや学習効果を意識したものである。単なる「エンタテインメント」では決してないのである。ただ、海外スタディツアーの「スタディ」はガイド化された学びとなる。ツアーでは参加者の学び自体もプログラム化されていると言える。どこに行き、何を見るのか、だれと交流し、どのような活動をするのかといったことが、あらかじめツアーの中に組み込まれている。参加者はそうしたフォーマットの中で自らの考えや思いを巡らすことになる。海外スタディツアーに必ずと言ってよいほど「事前（ツアー前）学習」と「現地滞在中のミーティング」、そして「事後（ツアー後）におけるふり返り研修」が含まれているのは、その証左である¹。

2.3. プログラム化された海外スタディツアーのメリットとデメリット

上記のように、いわゆる一般的な海外スタディツアーには事前に設定されたプログラムがあり、ツアー参加者はそれらを現地で体験していくことになる。そして、その経験を通じて学びが促されるようになっている。一方で、このように書くと、こういった海外スタディツアーには参加者の主体性が見当たらず、果たして学生の学びになっているのかという疑問も生じる。実際、海外スタディツアーが、単なる「よい体験」に終わってしまっているという指摘もある²。しかし、ツアー内容のプログラム化には次のようなメリットも存在する。

まずは現地での活動が効率的になるということである。参加者は限られた時間と予算の中で行くべきところに行き、会うべき人に会う必要がある。そのためには現地での行動計画は綿密に調整され、確立しておくべきである。プログラム化された海外スタディツアーでは、この点にメリットがある。また厳選された学びのためのプログラムは、主体性という点はひとまず置くとして、参加者に確実に学びを課すことができる。考えさせられる数々の現地体験や一日

の終わりに行われる「ふり返し会」、また現地の方や参加者同士とのディスカッションの時間がプログラムに組み込まれていることで、参加者は必ず学びに接することができる。これは初学者にとっては特に有益なものである。現地での時間を無為に過ごすことなく体験を優れた学びに変えるガイドをしてくれるのである。これはプログラム化された海外スタディツアーにおける大きなメリットである。他にも海外への渡航が初めての学生にとっては、ツアーの引率者がいることは極めて安心であろうし、それは保護者にとっても同様であろう。

2.4. もうひとつの海外スタディツアー

一般的な海外スタディツアーの特徴はそのプログラム化である。ツアー内容は主催者によって事前に決められており、参加者はそれを効率よく「消費」していくことになる。またそれは一定の学びにもつながっていく。プログラム化されているからこそそのメリットがそこにはある。一方、海外スタディツアーには、より主体的・能動的な学びを求めるものがあるとしてもよいのではないだろうか。事前に決められたルートだけを巡るのではなく、ツアー参加者自身が自主的に活動することを求めるようなプログラムを含むものである。例えば、参加学生自らがテーマを決めたうえで、一定期間、現地で調査を行うようなプログラムを組み込んだり、またその調査結果を現地の方々の前で発表するといったものである³。つまり現地でのフィールドワークをスタディツアーに組み込むというものである。もちろん、ツアー行程の全てがこうした自主的な活動に占められるのではなく、大学側が用意する体験プログラムや施設見学などとミックスされることになる。主催者は参加学生が自主研究テーマを設定しやすいようなフィールドを案内したり、現地のコーディネーターに調整やアドバイスをもらえるよう準備したりすることになる。また、フィールドワークの成果発表会に現地の学生や在住する日本人などに来てもらうようにすると、学生のモチベーションはより高まると考えられる。

このようなフィールドワークを伴う活動プログラムは、少なくともスタディツアー参加者に自ら考え、自主的に活動することを求めることになる。これは、事前に決められたルートをまわり、その日の終わりのミーティングで感想を述べるプログラムとは異なるスタディツアーになるだろう。繰り返すが、主催者側が準備したツアールートを巡るスタディツアーが悪いわけではない。またフィールドワークを取り入れたスタディツアーにも当然課題がある。本稿の目的は、この二つのスタディツアーの違いをとらえたうえで、それぞれのツアー参加者の学びに与える影響を検討するものである。次章では本稿が比較分析対象とする二つのタイプのスタディツアーについて説明し、それぞれのツアーに参加した学生からのアンケートデータをまとめ、分析を行う。そして二つの異なるスタディツアーが参加者の学びに対してどのような影響を与えているのかを検討していく。

3. リサーチデザイン

3.1. 分析概要

海外スタディツアーのタイプの違いによって、参加する学生の学びはどのように異なるのか。この課題に取り組むため、本稿では筆者が実際に企画し、学生を引率した二つの海外スタディツアーを取り上げて比較分析を行う。具体的には、それぞれのツアーに参加した学生からのアンケートデータをもとに、二つのスタディツアーがもたらす学びの効果を検討する。対象とする各スタディツアーの訪問国は異なるが、分析上、学生の学びに大きく影響を及ぼすほどの違いがあるとは考えていない。筆者は数回、両国を訪問しているが、街の規模や発展度、また現地の人々の様子は大きく変わらないと感じている。また現地でのプログラムについても、以下で説明するフィールドワークの有無以外は変わらないものである。そしてツアーに参加した学生に関しても、そのほとんどが1・2年生であり、性別は女性である。また、それぞれの国への訪問も全員が初めてであった。

参加学生には、スタディツアーの最終日、あるいは帰国後すぐに、参加したスタディツアーに関するアンケートに回答してもらった。質問は「〇〇について2つ教えて下さい」というもので、自由記述による回答を依頼した。「〇〇」に入る内容は、大変だったこと、嬉しかったこと、驚いたこと、辛かったこと、印象に残っていること、成長できたと思うこと、現時点での反省点などである。本稿では、学びという視点から後述する三つの質問項目を取り上げ、各スタディツアー間での学生のデータを比較し、その特徴を検討した。

3.2. 分析対象スタディツアーの概要

比較する二つの海外スタディツアーの概要は以下のとおりである。まずは参加者自らが現地で行うフィールドワークを含むスタディツアーである。本稿では、このツアーを「主体性重視型スタディツアー」と称する。ここでは2017年と2018年に実施されたベトナム・ダナンでのスタディツアーを取り上げている。現地で行うフィールドワークとは、参加学生が自らテーマを決め、知りたいこと、確かめたいことを実際に調査するものである。学生のフィールドワークは、多くの場合ペアを組んで行われた。ツアーに参加した友人同士、あるいはたまたま同じ学部学科であった学生同士が共通のテーマを設定し、協力しながら参与観察やインタビュー調査を行っていた。教員は調査テーマを設定する段階からアドバイスをを行い、短期間で実施でき、かつ一定の研究成果を上げられるよう指導した。夜のミーティングの際にはその日の進捗を確認し、翌日の調査や成果発表会につながるようアドバイスをを行った。表3はツアー参加学生の現地フィールドワークの調査テーマである。各学生らは自らのテーマに沿って現地

①現地フィールドワークを組み込んだ「主体性重視型海外スタディツアー」(2017年度)

- ・海外スタディツアー訪問地：ベトナムダナン市
- ・期間：2017年9月10日～17日、
- ・参加学生：2017年1年生7人、2年生2人

表1 主体性重視型海外スタディツアープログラム(2017) 行程・内容

日程	行程・プログラム
一日目	午前：福岡発→ホーチミン経由→ダナン着 ホテルチェックイン後、夕食。ミーティング
二日目	午前：現地日系企業訪問。日本人マネジャーからベトナムの経済情勢と企業の事業内容についてレクチャーを受ける 午後：市内見学 夜：ミーティング(一日のふり返りとフィールドワークの実施に向けて)
三日目	午前：ダナン大学教員による講義(ベトナムの経済社会と環境問題について) 午後：ダナン市にある環境関連施設(浄水場、廃棄物埋め立て地)への訪問。 夜：ミーティングと各自フィールドワーク活動準備
四日目	午前：ホイアン市へのショートトリップ。現地で環境活動を行う日本人を訪問、インタビュー。 午後、ホイアン市にて各自のテーマに沿ったフィールドワーク。 夜：ダナン到着後、各自フィールドワーク活動の報告。教員からのコメント、アドバイス。
五日目	午前・午後：各自、自らのテーマに沿ったフィールドワーク活動 夜：ミーティング。各自、日中の活動内容を報告 教員からのコメント、アドバイス
六日目	午前：各自フィールドワーク活動のまとめ、および発表準備 午後：フィールドワーク活動成果発表会 夜：ダナン発→ホーチミン経由→翌朝福岡着

②現地フィールドワークを組み込んだ「主体性重視型海外スタディツアー」(2018年度)

- ・海外スタディツアー訪問地：ベトナムダナン市
- ・期間：2018年9月9日～16日
- ・参加学生：2年生7人、3年生1人

表2 主体性重視型海外スタディツアープログラム(2018) 行程・内容

日程	行程・プログラム
一日目	午前：福岡発→ホーチミン経由→ダナン着 ホテルチェックイン後、夕食。ミーティング
二日目	午前：ダナン大学教員による講義（ベトナムの経済社会と環境問題について） 午後：現地日本語学校の学生と交流 夜：振り返りとフィールドワークに向けての準備
三日目	午前：現地日系企業訪問。日本人現地法人社長よりレクチャー 午後：ホイアン市へのショートトリップ。現地で環境活動を行う日本人を訪問、インタビュー。午後、ホイアン市にて各自のテーマに沿ったフィールドワーク 夜：ダナン到着後、各自フィールドワーク活動の報告。教員からのコメント、アドバイス。
四日目	午前・午後：各自、自らのテーマに沿ったフィールドワーク活動 夜：ミーティング。各自、日中の活動内容を報告。教員からのコメント、アドバイス。
五日目	午前・午後：各自、自らのテーマに沿ったフィールドワーク活動 夜：ミーティング。各自、日中の活動内容を報告。教員からのコメント、アドバイス
六日目	午前：フィールドワーク成果発表会準備 午後：ダナン大学にて成果発表会。その後ダナン大学学生との交流会。
七日目	午前：フリータイム。 午後：ダナン→ホーチミン→福岡

で調査を行い、その成果を現地の大学生の前で発表した。こうした活動が各学生にどのような影響を与えたかについては次章にて記述する。

続いて表4に示すのは、ツアー参加者によるフィールドワークを含まない「プログラム型海外スタディツアー」である。今回はカンボジアで行ったスタディツアーがこれにあたる。カンボジアでのスタディツアーに参加した学生は、教員が事前に設定した訪問場所を順次めぐっていった。各日の夜にはミーティングを行い、その日に訪れた場所や聞かせてもらった話の内容などについて振り返りを行ってもらった。現地の中学生や大学生との交流については日本にいる段階である程度の企画を行い、資料などを作成し準備を整えておくよう指導していた。

では、この二つのタイプの海外スタディツアーに参加した学生は、それぞれどのような経験をし、そしてどのような学びを得たのか。次章では参加学生によるアンケートへの回答結果にもとづいて、ツアーに参加したことによる成果を読み解いていく。

表3 学生による現地でのフィールドワークのテーマ

2017年度テーマ	2018年度テーマ
<ul style="list-style-type: none"> ・ベトナム在住日本人へのキャリアインタビュー ・ベトナムと日本の住宅建築様式の違い ・ベトナムに息づく日本文化 ・ベトナム人の環境意識について 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベトナムのトイレ事情（衛生観という視点から） ・ベトナムと日本の色彩感覚の比較 ・ベトナムコスメ事情 ・ベトナムにおける都市開発と景観問題 ・ベトナム人の「ペット」に対する意識

③事前に設定したツアー行程を巡る「プログラム型海外スタディツアー」

- ・海外スタディツアー訪問地：カンボジアシエムリアップ・プノンベン
- ・期間：2019年2月17日～23日
- ・参加人数：2年生4人、3年生2人
- ・現地での訪問先・活動内容は、ほぼ大学が設定したもの

表4 「プログラム型海外スタディツアー」 ツアープログラム行程・内容

日 程	行程・プログラム
一日目	午前：福岡発→ハノイ経由→ダナン着 ホテルチェックイン後、夕食。ミーティング
二日目	午前：現地日系NPO訪問。現地にてインターンに来ている日本人大学生による案内。 午後：現地日系NPO訪問。ここでもインターンに来ている日本人大学生による案内を受ける。 夜：市内マーケットを散策。ミーティング（一日のふり返り）
三日目	午前・午後：アンコールワット遺跡見学 夜：プノンベンに移動
四日目	午前：プノンベンJETRO事務所訪問。現地日本人職員の方からカンボジアの社会経済について説明を受ける。 午後：現地中学校で環境関係の模擬授業。その後、中学生と清掃活動を通じた交流 夜：ミーティング。各自、日中の活動内容を報告
五日目	午前：市内見学 午後：現地大学を訪問。学生との交流 夜：ミーティング。各自、日中の活動内容を報告
六日目	午前：現地にて内戦資料館などを見学 午後：フリー 夜：プノンベン発→ハノイ経由→翌朝福岡着

4. 分析：学生の感想から見る両スタディツアーでの学びの違い

4.1. 「主体性重視型スタディツアー」の回答結果について

まずは現地でのフィールドワークを取り入れた「主体性重視型スタディツアー」に参加した学生の回答からみていくことにする。分析対象としたアンケートの質問項目は、「参加した海外スタディツアーにおいて、(1)大変だったこと／苦労したことは何ですか、(2)反省点／悔しかったことは何ですか、(3)自分自身の変化を教えてください」という三つとした。これはスタディツアーでの経験とそれに対するふり返り、および、そこからの学生の学びと成長

をより顕著に表すものであると考えたためである。

それでは、各質問項目に対するツアー参加者の回答傾向を見ていく。まず「大変だったこと／苦労したことは何か」という質問に対しては、以下のような回答がなされた。ここで特徴的なのは、「研究成果発表会」に関連する回答が多くみられたことである。また、自分たちだけで調査することの難しさに関連した回答も多く見られた。逆に、海外生活の不便さなどに言及するものがほとんどなかったのは興味深い。というのも、後述する「プログラム型スタディツアー」ではそうした回答が多く見られたためである。

Q. 大変だったこと／苦労したことは何ですか

調査の難しさ、フィールドワークにおけるデータ集めの大変さ(4名)／英語力のなさ(4名)／(発表において)自分の言いたいことを伝える難しさ(3名)／日本語をより簡単な日本語に直すこと(3名)／発表の準備(3名)／自分たちだけで行動することの大変さ、自由時間のスケジュール決めの難しさ(3名)／ベトナム人に自分の考えをうまく伝えることの難しさ(2名)

次に「反省点・悔しかったこと」についてである。ここでも研究発表会の出来に関連する回答が多かった。また「研究成果発表会」に対する反省が顕著に見られ、よい「学び」がなされていることが確認できた。

Q. 反省点／悔しかったことは何ですか

自分の調査したいことが中途半端に終わったこと(3名)／もっと外に出ていろいろ体験すべきだった(3名)／事前にもっと調査のための計画を立てるべきであった(2名)／もっと多くの日本語学校の学生と話せばよかった(2名)／友達に比べ、自分の英語力の低さ、また知識の少なさ(2名)／自分の研究発表について、ベトナムの学生に意見を聞けなかったこと／発表内容のデータが少なく、統計として不十分だった／インタビューをすることの難しさ、うまくできなかった／言いたいことを伝えるために、日本語を勉強しなければならない／自分以外の学生は、自分の軸をちゃんと持っていた

最後は、より直接的に、「自分自身の変化」についての質問である。フィールドワークを含んだこのスタディツアーの経験を通じて、どのような自分自身の変化を感じることができたのかを回答してもらった。回答からは、ここでもフィールドワークや成果発表会が強い影響を与えていることが確認できた。この二つの活動を経験することで、自らの積極性の向上や、海外、または日本に対する考えを新たにすると回答した学生が多くいた。つまり行動変容、および価値変容を感じている学生の存在を確認できる結果となった。そして、その変化(変容)の内容

も学びに関連したものであることも特徴的であった。

Q. 自分自身の変化について教えてください

もっとコミュニケーションをとってほしいと思うようになった (3名) / 英語について真剣に勉強しようという思い (3名) / 自分の疑問のために積極的に動くようになった (3名) / 視野が広まった (3名) / 自分の日本への考え方が大きく変わった (2名) / やはり海外に行くことは楽しいと再確認 (2名) / 自分と向き合い、自身を知ることができた (2名) / 日本を客観的にみられるようになった / 日本 (語) についての関心が高まった

4. 2. 「プログラム型海外スタディツアー」の回答結果について

それでは、続いて「プログラム型海外スタディツアー」の回答傾向をみていくことにする。また、それらが「主体性重視型海外スタディツアー」とどのように異なるのかも検討していきたいと思う。まずは「大変だったこと / 苦労したこと」についてである。

ここでの回答で最も特徴的だったのは、学びとは直接関係のない回答が多く見られたということである。「プログラム型スタディツアー」に参加した学生の多くは、海外での生活、団体で行動すること、体調管理などが大変だったと回答した。模擬授業の準備や実施に際しての大変さを言及する学生もいたが、その割合は非常に少なかった。これは「主体性重視型スタディツアー」の回答傾向とは大きく異なっていた。主体性重視型のスタディツアーに参加した学生の多くは、成果発表会の準備や本番での苦労、またフィールドワークそのものの変革について回答していた。これはスタディツアーの中で実施されたフィールドワークというプログラムの存在が、学生にとっていかに大きいものであったかを物語るものになっているといえる。さらに、このような回答傾向は「反省点 / 悔しかったこと」でも確認できた。主体性重視型のスタディツアー参加者は「反省点 / 悔しかったこと」としてフィールドワークの成果発表会における自らの不甲斐なさを言及する傾向にあったが、プログラム型では学びとは関係のない個人的な失敗について多く回答した。これは二つのスタディツアーの比較において非常に大きな違いであった。以下は「プログラム型海外スタディツアー」参加者による主な回答である。

Q. 大変だったこと / 苦労したことは何ですか

衛生面 (4名) / 移動 (4名) / 海外生活の不慣れ (暑さ、体力、体調管理、交通事情、現地客引き、言葉の問題 (3名)、食事) / お風呂 (バスタブ) がなかった (3名) / 早起き (3名) / 一人の時間がなかったこと (2名) / 模擬授業の準備 / 伝えることの難しさを実感 / 実際の内容について再検討の必要性

Q. 反省点／悔しかったことは何ですか

〇〇（カフェ、マッサージなど：筆者注）に行けなかった（2名）／忘れ物が多かった／もっとお金を持ってきたらよかった。／模擬授業の内容の薄さ／もっと多くの人に話を聞けばよかった／英語力の低さ／周りの人に助けてもらうことが多くて、自分だめだな／カンボジアの歴史や英語を事前に勉強しておけばよかった。

最後は「自分自身の変化」に関してである。前述の「主体性重視型スタディツアー」では参加者による現地でのフィールドワークや成果発表会をきっかけとした学びへの新たな思いを多く確認することができたが、「プロジェクト型スタディツアー」ではそのようなものはほとんどなかった。ここで見られたのは、いわゆる「旅＝ツアー」が終わったあとの一般的な感想に近いものであった。

Q. 自分自身の変化について教えてください

日本の良さをあらためて知れた（4名）／カンボジアが好きになった（3名）／自分自身を客観的に見ることができるようになった（2名）／旅することが好きだという自覚（2名）／海外に慣れてきたなという感覚／将来やりたいことが見つかった気がした／日本と世界の違いについて知ることができた／就活における企業選びの基準が変わった／将来のやりたいことが見えてきた／現地の人とのコミュニケーションが楽しくなった／夏より冬が好きだ

5. 議論

5.1. 比較を通じて：「学び」という視点から

以上、本稿では二つの異なる海外スタディツアーを取り上げ、それぞれのツアーに参加した学生からのアンケートデータをもとに、学びという視点から分析を行ってきた。二つのスタディツアーの違いは、そこにフィールドワークの実施とその成果発表会が含まれるかどうかであった。

参加学生からの回答結果を比較すると、現地でのフィールドワークの実施を伴う「主体性重視型フィールドワーク」では、学びに関する言及頻度が高くなっていた。特に、フィールドワークと成果発表会の経験を踏まえたうえでの感想や反省が多く寄せられていた。逆に、大学によって設定されたルートをまわっていく「プログラム型スタディツアー」の参加者からは、こういった回答はあまり見られなかった。こうした差異は、少なくとも、訪問国や参加者の属性によるものではないと考えられる。訪問国であるベトナムとカンボジアはともに発展途上国であり、

街の雰囲気も良く似ている。ツアーの中で見学する場所の特性も大きな違いはないと言える。また学生に対するスタディツアーの公募形式も同じであり、参加学生の学年や所属学部にも大きな違いはなかった。決定的な違いは、やはりフィールドワークの有無であり、それが参加学生の学びと成長に影響を与えたものと言える。それでは、なぜフィールドワークを取り入れた主体性を重視する海外スタディツアーは参加学生の学びに影響を与えたのか。

5.2. 学生の主体的行動と反省からの学びについて

海外スタディツアーに参加する学生が現地でフィールドワークを行う際、そこには試練とも言うべき多く難題がのしかかる。学生にとってフィールドワークを実施するためには、まずは自己との対話が必要になる。自分は何について知りたいのか、あるいは何を知るべきなのかといったことを自問し、それを明らかにすることでフィールドワークは動き始める。また実際に調査が始まったとしても、さらにその過程で自らの知識の少なさや分析能力の低さ、またインタビューの際にはコミュニケーションの難しさといった数々の苦難に直面する。海外であればそこに語学力のなさも加わってくる。そして、何とかデータをとり、ようやく結果をまとめたとしても、次はそれを発表する際にまた失敗をする。実際、今回のアンケートからもそのような回答を多く確認することができた。

ただその一方で、そうした経験は学生に反省を与える機会にもなる。特に異国での失敗はより強いインパクトとして反省を促すことになる。そして、その反省を通じて学生は自分自身を見つめ直し、今後のやるべきこと、進むべき方向を考えるようになっていく。これが学生にとっての学びにつながっていくと考えられるのである。

もちろん反省だけでなく、学生はフィールドワークを通じて新たな発見をしたり、また自らの知的好奇心を満たす面白さも知っていく。自分の言いたいことが伝わった時のうれしさも学生にとっては大きな刺激となる。これも海外という舞台でこそ一層際立つものになるとも言える。海外の誰も助けてくれない状況のなかで自ら考え、行動し、結果につなげたという経験が自信となり、それが参加学生への学びへの意欲につながっていくと考えられるのである。

では、もうひとつのスタディツアーである「プログラム型スタディツアー」では、こうした学生の学びにつながらないのかと言えば、当然そうではない。現地で活躍するNPOへの訪問や関係者へのインタビュー、また現地の学校でのプレゼンテーションや学生との交流、さらに様々な施設への見学など、効率的に計画されたプログラムを通じて参加学生たちは多くの経験をすることができる。そして毎日のふり返しを行うことで参加者の学びは深くなっていくと考えられる。現在多くの大学で実施されているこうした海外スタディツアーの教育的効果については評価されるべきであろう。二つの海外スタディツアーに優劣があるわけではないのである。

5.3. 海外スタディツアーの可能性を求めて

ここまで、本稿では二つのタイプの海外スタディツアーを取り上げ、学生の学びという視点から両者を比較検討してきた。アンケートを通じた参加学生の回答からは、現地でのフィールドワークがもたらす様々な経験が参加学生の学びに強い影響を与えていることを確認することができた。海外でのフィールドワークは多くの困難や失敗を伴うが、それは学生に反省を促すことになり、逆にうまくいった経験は新たな自信と更なる学びへのモチベーションをもたらすことになった。その意味で主体性を必要するとフィールドワークを組み込んだ海外スタディツアーは、学生により多くの学びをもたらすものであると言える。

一方、こうしたフィールドワークを伴う「主体性重視型海外スタディツアー」が機能するためには条件がある。まずは、そこに参加学生の意欲が必要になるということである。そもそも現地で調査をしたいという学生の思いがなければ、こうしたプログラムは逆効果になる。学生の中には、その限られた現地滞在時間の中で、より多くのものを見たり、体験したいというものもあるだろう。そうした参加者にとっては、ひとつのテーマに絞って現地調査を行うことは魅力的ではないと言えよう。

さらに学生の能力も重要である。フィールドワークの経験がないものにとって、いきなりそれを海外で実施することはハードルが高い。何をしてもよいのかわからないまま時間だけが過ぎていき、中途半端な結果になってしまう可能性もある。確かに引率教員による指導もあるが、時間的、または人間的な制約の中で十分なフォローができるのか不確かなところもある。現地のことをより広く、適切に知りたいのであれば、それは「プログラム型スタディツアー」の方が有利だとも言えるのである。

他にも、フィールドワークを伴う海外スタディツアーには安全上の問題もある。学生だけの行動には大きなリスクも伴う。逆に学生が現地の方に迷惑をかける場合もある（高橋、2008）。こうした問題の一つひとつに気を配りながら実施しなければならないのが「主体性重視型海外スタディツアー」と言える。このような意味からすると、全ての海外スタディツアーにフィールドワークが必要でないことは明らかであろう。

6. 最後に

近年、多くの大学、また中学や高校においても海外スタディツアーが実施されているが、そのプログラムはツアーに参加する学生にどのような学びを得てもらいたいのかという教育的視点に基づいて構築されるべきである。教育する側の理想や思いだけでなく、学生自身の関心や学びの能力などを考慮しながら企画をし、実施につなげていかなければならない。また金銭的・

時間的制約や現地での指導体制、さらには訪問する国や地域の状況などにも配慮する必要がある。これは主体性重視のスタディツアーでも、事前に設定したコースをまわるプログラム型のツアーであっても同様である。ツアーを主催するものは様々な要因を考慮したうえで、どちらのタイプの海外スタディツアーを採用するのかを決定しなければならない。もちろん両者の長所を取り入れたプログラム構築も可能である。現地での充実した活動が参加学生の学びと成長につながっていくのである。

注

- ¹ このような意味で、一般的な海外スタディツアーというのは、プログラム化された学びの体験であると言える。自分ではなく他者によってつくられた学習コンテンツを消費していくプロセスである。実際、大学によっては、実施する海外スタディツアーの企画や実施を旅行会社や NGO・NPO などに委託する場合もあり、参加する学生は「用意された」学びを消費しに行くことになる。
- ² だからこそ、体験だけにとどまらず、体験を言語化して学びにつなげていこうという「事後学習」の重要性が説かれるわけである（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター、2016）
- ³ または、事前に設定したテーマに基づき、日本にいるときから準備を進め、現地でそのプロジェクトを実施したり、政策提言を行ったりするものなども考えられる

参考文献

- 池内秀己・齊藤毅憲・旗本智之・吉田優治編（2014）『グローバル人材を育てます』学文社。
- 岩下康子（2017）「学生の意識・行動変容からみたスタディツアーの評価」『広島文教グローバル』(1), pp.11-22。
- 子島 進・藤原孝章編（2017）「大学における海外体験学習」『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版。
- 高橋優子（2008）「スタディツアーの教育的意義と課題 —JICA カンボジア事務所での経験に基づいて—」『筑波学院大学紀要』 vol.3, pp.149-158。
- 人見泰弘（2015）「異文化対応力の習得に向けて—タイ・スタディツアーにおける学習成果の事例から—」『名古屋学院大学論集社会科学篇』 第 52 巻第 1 号、pp.167-182。
- 三宅博之（2015）「バングラデシュへのスタディ・ツアーを通しての学生の価値変容」『国際論集』 第 13 号、pp.21-40。
- 村田晶子編（2018）『大学における多文化体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版。
- 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編（2016）『体験の言語化』成文堂。